

展覧会「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」の展示企画について [論考]

小林 克弘*、王 聖美**、久下 高豊***

On NAMA's Exhibition "Explorations of HORIGUCHI Sutemi: Modernism, Rikyu, Garden, Waka"

KOBAYASHI Katsuhiko, OH Seibi, KUGE Takatoyo

NAMA's Exhibition "Explorations of HORIGUCHI Sutemi: Modernism, Rikyu, Garden, Waka" was the first comprehensive exhibition in Japan on HORIGUCHI Sutemi, an architect of great importance in the history of modern Japanese architecture. This paper describes the points that were particularly considered and devised during the planning stage for the exhibition. Chapter 2 describes the consideration of the exhibition's chapter structure, and Chapter 3 summarizes the characteristics of the exhibition and what was learned through the exhibition.

キーワード：分離派建築会、アムステルダム派、紫烟荘、国際様式、茶室研究、明治大学

Bunriha Kenchikukai, Amsterdam School, Shienso, International Style, Tea House Study, Meiji University

1. はじめに

文化庁国立近現代建築資料館では、2024年8月9日(金)～10月27日(日)の期間、建築家・堀口捨己(1895-1984)に関する展覧会「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」を開催した。日本の近現代建築史上、極めて重要な建築家である堀口捨己に関する、本邦初の総合的な展覧会である。

2024年は、堀口捨己没後40年にあたる。各所で分散保管されてきた資料群が、当館に寄贈され、堀口捨己建築資料として一堂に会することとなり、それにより、堀口の生涯にわたる活動を多面的、総合的に紹介する展覧会を実現することが可能となった。

展覧会の具体的内容に関しては、図録に取りまとめであり、図録のPDFは当館HPにて閲覧可能となっている¹。また、展示会場の様子および実施報告については、本紀要末尾の年次報告にて掲載しているが、本稿では、展覧会開催を企画する準備段階に検討した点、工夫した点、さらに、展覧会を通じて分かった点などについて述べる。具体的には、2章において、展覧会の章構成の検討について述べ、3章において本展の特徴および本展開催によって理解できたことを整理して述べる。

2. 展覧会の構成、特に時期区分に関する検討

堀口捨己(1895-1984)は、国内最初の本格的近代建

築運動とされる分離派建築会結成に際して中心的役割を果たし、1930年代には日本を代表する国際様式建築を実現した。西欧の近代建築の動向をいち早く理解するとともに、国内の茶室や数寄屋建築に関する卓越した研究業績を残し、第二次世界大戦後には、現代数寄屋建築を実践して大きな影響を残した。堀口は、1920年頃から1970年代の日本建築界を代表する建築家の一人であり、近代建築と日本の伝統建築双方に対して深い洞察を巡らせた稀有な建築家といえることができる。茶の湯、和歌にも通じ、建築や庭園のデザインのみならず、広いジャンルで創造力を発揮した。そこに、堀口の類稀な探求心と創造力の結実を見ることができる。

本展覧会は、堀口の学生時代から晩年に至るまでの代表作品のオリジナル図面に加えて、1920年代欧州視察時の写真、分離派建築会展資料、茶室や庭園の実測研究資料、原寸茶室模型等の展示を通じて、建築家・堀口捨己の建築、思想、創造世界を総合的に紹介することを目指した。

タイトルでは、主タイトルの「建築家・堀口捨己の探求」に続けて、サブタイトル「モダニズム・利休・庭園・和歌」を列記した。相異なるカテゴリーが列挙されることは、やや唐突な印象を与えかねないが、その唐突ともいえる広がり自体が、堀口の探求の多様さを具体的に示す効果をもつと判断した。

*文化庁国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官、工学博士 **文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員、修士(芸術)
***元・文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員、工学士

展示においては、厳密な順路があるわけではないが、基本的には、章構成に沿って展示物を見る形になるので、閲覧に際してわかりやすい章構成となっている必要がある。これまで堀口捨己について、誕生から晩年までの生涯及び業績を通年的にまとめた書籍や出版物は存在する²。しかし、展覧会という形では、堀口の業績全体を経年的に展示する試みは初めてであった。それ故、まず、展覧会という形式の中で、堀口の活動をいくつかの局面に分けて展示すると、その作風や活動を分かりやすく展示できるかという点を検討する必要があった。従来の書籍や出版物では、堀口の活動を大きく三期に分けている場合が多い。分離派建築会から西欧の近代建築を学んで、自らの作品を作り始める1920年代、より機能主義・合理主義へと移行した近代建築を学び、併せて、日本の茶室・数寄屋建築研究に着手する1930年代から終戦まで、そして、円熟した現代建築および現代数寄屋建築を並行して作り続ける終戦以降1980年頃までである。

時期区分を検討する際に難しいのは、第一に、堀口が学んだ西欧の近代建築運動自体、1920年代に大きく変化しており、20年代初頭ではドイツとオランダの表現主義建築の傾向が強かったのに対し、1920年代後半は、近代建築の主流は、より抽象主義的な造形、合理主義的な思考へと流れを変えて、それらが「国際様式」と呼ばれるものになることである。このことは、1920年前後のミース・ファン・デル・ローエやヴァルター・グロピウスの作品にも表現主義的造形が表れていることから明らかである。つまり、西欧の近代建築の動きを素早く吸収しようとした堀口にとって、範とすべき近代建築自体の流れが大きく変化しつつあったということである。時期区分を難しくする第二の点は、堀口が機

能主義・合理主義作品を設計した1930年代後半という時期と茶室・数寄屋建築研究に着手する時期が重なることである。

そうした状況を鑑み、本展では、下記の4期に分けた展示として、2~4期は、数年ずつの重なりを許容する形での時期区分を行うことが、堀口の活動を理解する上で、より理解しやすい展示になると判断した。

以下、章ごとの概要および展示作品を要約して述べる。

2.1. 分離派建築会と表現主義の影響 1920-1929

堀口は、1920年には、5名の同級生と共に結成した分離派建築会の運動で中心的な役割を果たし、当時の工学技術に偏重していた建築の在り方に反抗する運動を開始する。第一回分離派建築会に際して出版された『分離派建築会宣言と作品』の表紙デザイン(図1)や編集も堀口が手掛けた。1923年7月から翌年3月まで、ヨーロッパ各地に赴き、当時の西欧の近代建築の実作を熱心に見て回り、併せて、近代建築の動向に関する情報収集を行った。

帰国後、建築設計に本格的に取り組み、小出邸(1925年)、紫烟荘(1926年、図2)、双鐘居(1927年)などの住宅作品を世に問う。1920年代の作品群からは、西欧の近代建築の動向を学びながら自らの表現を模索する姿が見える。例えば、洋行前の作品である平和記念東京博覧会(1922年)の曲線を用いた造形では表現主義の影響、紫烟荘の外観ではオランダで見た曲面茅葺屋根をもつ住宅やアール・デコの幾何学的な構成の影響、双鐘居ではフランク・ロイド・ライトの影響などが見られる。

この章の展示対象とした建築作品として、西洋の近代建築の影響が読み取りやすい「分離派建築会」、「平和記



図1 分離派建築会『分離派建築会宣言と作品』
岩波書店 | 表紙画 堀口捨己 | 1920

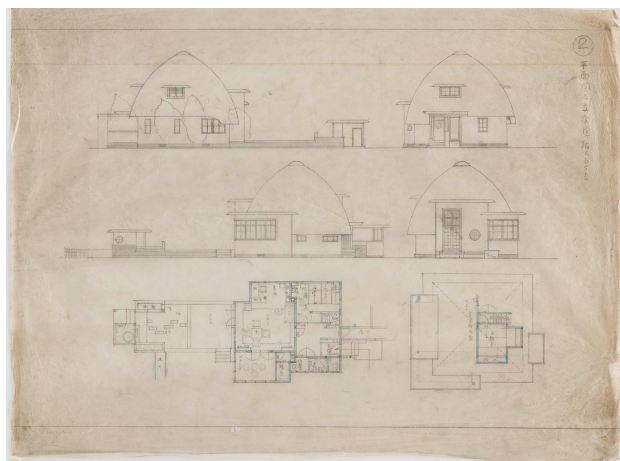


図2 紫烟荘 平面図及立面図 | 作成年未詳

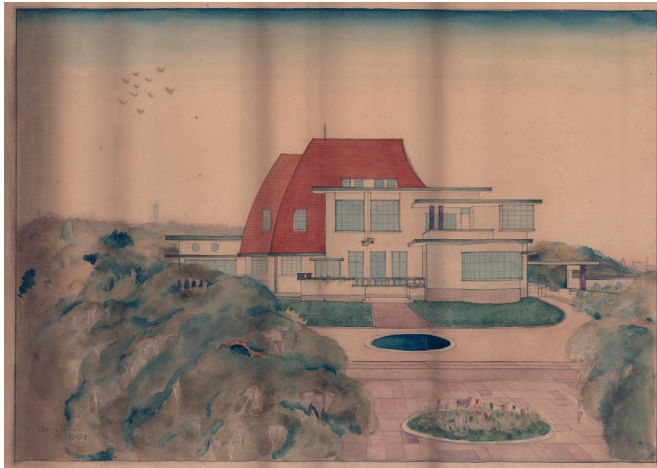


図3 吉川邸初期案透视图 | 1925

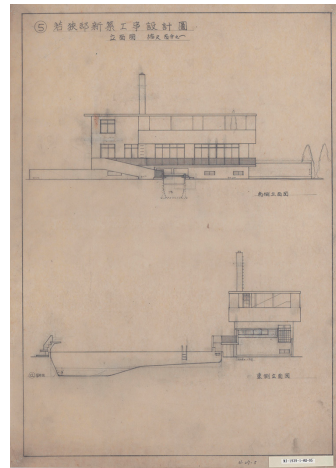


図4 若狭邸立面图 | 作成年未詳

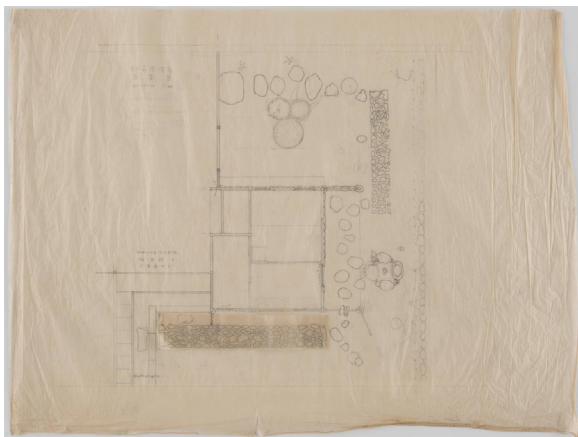


図5 妙喜庵待庵庭園図 実測図 | 1936

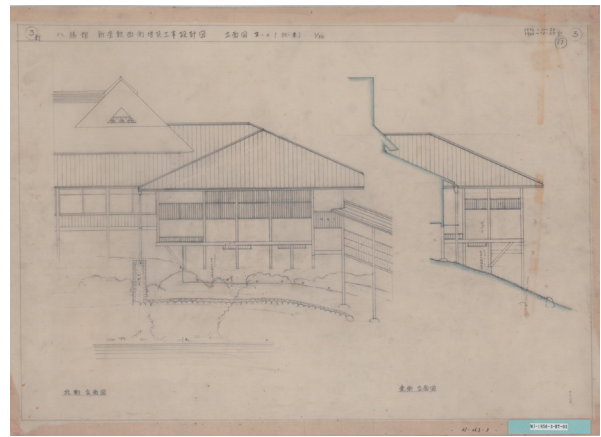


図6 八勝館さくらの間立面图 | 1956

念東京博覧会」、「小出邸」、「紫烟荘」、「双鐘居」を選んだ。

2.2. 国際様式への傾倒 1930-1939

堀口の作風は、「吉川邸」(1930年、図3)以降、2つの点で大きく変化する。第一点は、建築のみならず庭園のデザインを一体的に考えるという傾向が強くなることである。「岡田邸」(1933年)では、住宅の内部に合わせて和洋の庭園デザインを巧みに使い分けるといった手法が見られる。建築と庭園を共に全体を構成する要素としてとらえるという考え方は、その後の堀口の作風における基本方針になっていく。

第二に建築デザインにおいては、1920年代に見られた表現主義的な要素や装飾的な要素が消えていく。この点は、西欧における近代建築の展開とも軌を一にする。先述したように、西欧では、1910年代末から20年代にかけて第一次世界大戦による社会不安もあり、曲面や鋭角を多用して感情移入を行った表現主義が主流であったが、20年代にはオランダのデ・ステイルに

見られる線と面による抽象的な構成、あるいは幾何学的な表現を重視するアール・デコ(1925年様式ともいわれる)などの動向が強まる。更に20年代後半には、白い箱型、無装飾、非対称性、機能重視の合理的表現が主流になり、それが「国際様式(インターナショナル・スタイル)」と呼ばれて近代建築運動の主流となっていく。堀口は「大島測候所」(1938年)と「若狭邸」(1939年、図4)という、国際様式を実践した作品によって、日本の近代建築を代表する存在になった。

この章での展示対象とする建築作品は、「吉川邸」、「岡田邸」、「大島測候所」、「若狭邸」、「忠霊塔設計競技案」である。「忠霊塔設計競技案」は、堀口の中での、左右対称性が強く、最も歴史主義的な印象を与えるが、戦争に向けて変化していく建築界の中で、堀口のジレンマを知ることができる作品という意味で展示対象とした。

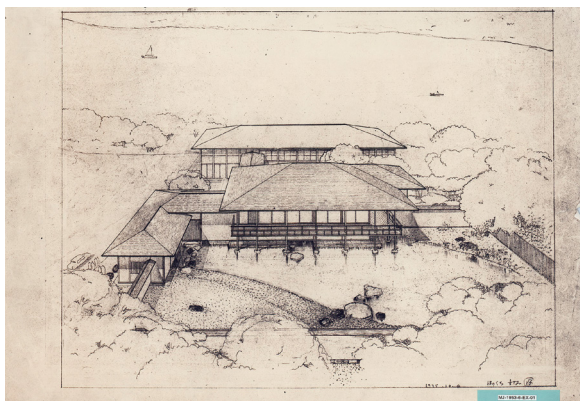


図7 サンパウロ日本館 透視図 | 1953



図8 湯河原萬葉公園 配置図 | 1953-54

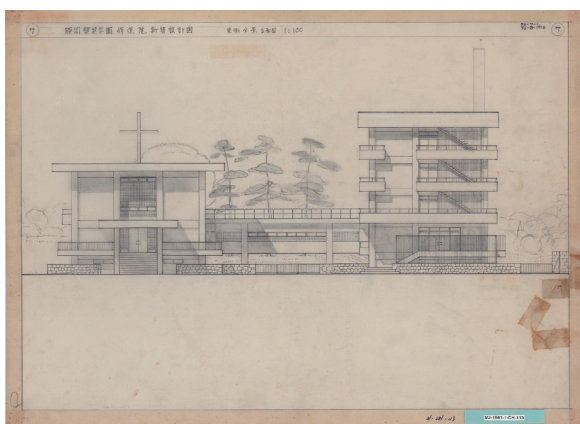


図9 静岡雙葉学園 修道院・礼拝堂 東側立面図

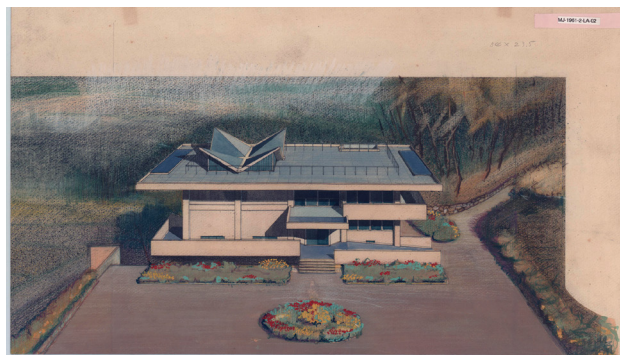


図10 常滑市立陶芸研究所 透視図 | 作成年未詳

2.3. 「日本」の探求 1936-1958

堀口は、「大島測候所」や「若狭邸」などの、日本における国際様式の代表的な作品を実現することと並行して、1930年代後半から40年代にかけて茶室や数寄屋建築の研究に傾倒して、多くの実作調査を行った成果を、学位論文「書院造と数寄屋造の研究」(1944年)、著書『利休の茶室』(岩波書店、1949年)などの研究業績と著作に残した。欧米の近代に学ぶという風潮が主流であった時代に、日本独自の文化や伝統にも注目するという姿勢と眼差しを世に広めた点は、重要である。

こうした「日本的なるもの」への関心と近代建築の摂取は、相矛盾することのようにも思える。しかし、「日本的なるもの」への関心は、近代建築の探求の放棄ではなく、むしろ、素材の重視や抽象的構成といった点で両者は共通しており、かつ、日本建築の研究が、近代建築に新たな展開と視座を与えるという積極的意味を備えているという理解に基づいていたと考えると、堀口の思考の中では、国際様式と日本的建築への関心が違和感なく共存したと理解することができる。

展示した研究及び建築作品は、「一連の茶室の実測調

査」(図5)、「八勝館八事店」(図6)などである。

2.4. 伝統と近代の境界を超えて 1954-1984

この時期の堀口捨己の作品は、一見すると、木造を主とした現代数寄屋建築と鉄筋コンクリートを用いたモダニズム建築に大別される。しかし、各要素がロジカルに構成されている点、伝統や様式に縛られず機能に対応した技術を活用している点、そして色や幾何学形態を用いた独自の表現という点では、表面的に異なる二つの作風はかけ離れたものではなかったと解釈することができる。

壮年期の茶室と庭園研究において近代建築史の観念を通して伝統を解釈したように、堀口にとっては歴史の中の書院造・数寄屋造と同時代のモダニズム建築は繋がっており、伝統と近代の境界を超えて数寄屋建築もまた同時代の建築であった。

展示した建築作品は、「サンパウロ日本館」(図7)、「万葉公園・万葉館・万葉亭」(図8)、「静岡雙葉学園」(図9)、「常滑市立陶芸研究所」(図10)、「清恵庵」である。堀口は、1949年に明治大学教授に就任して建築学科

の創設に貢献し、1965年の退官までに同大学の駿河台、和泉、生田の各キャンパスの校舎を設計したが、これらの校舎建築は、昨年度日本建築学会大会（明治大学駿河台キャンパス、2024年8月27日～8月30日）にて開催された『堀口捨己と明治大学校舎建築 1955-65』展において展示されたため、当館での展示には含めていない。

3. 本展の特色および開催を通じての発見

3.1. オリジナル図面と多彩な資料による展覧会

冒頭に述べたとおり、堀口捨己没後40年にあたる昨年に当館に寄贈された堀口捨己建築資料によって、堀口の生涯にわたる活動を多面的、総合的に紹介する機会が実現した。資料群に含まれる完成した建築の基本図面だけでなく、非実現の案、家具図、茶室調査の実測図や寸法表、写真、手帳、書簡、版下、図集、和歌、掲載雑誌、音声等を展示に活用することで、堀口資料の多彩なまとまりとしての姿を伝えることを意図した。

本展では、代表建築作品の原図を含む約200点の展示資料を通じて、建築家・堀口捨己を学ぶことができる。併せて、展示品を丹念に見ていくと、大変興味深い

様々な事実がわかってくる。

例えば、「紫烟荘」では、図面の書き方が、2枚を1枚にまとめて書いており、そのレイアウトも興味深い（図11）。何のためにこのような描き方をしているか、その理由はわかっていない。図面を書くという作業を考えると、180度回転させて描かねばならないので、手間がかかるはずである。ただ、2枚まとまっているため、図面を青焼きする場合は枚数が少なくなるという長所はあるし、青焼きした図面を中央折して裏側を糊付けすると製本しやすいということを狙ったのかもしれない。堀口は、多くの著書を著すが、特に作品集の場合には、大判を横遣いして、レイアウトするという行っており、図面の場合もそうした編集的工夫の意識が表れたのかもしれない。

初期の堀口は、建築が完成するごとに、作品の図集を作成している。本展ではそれらの原物を展示し、見開きを電子媒体として投映した。その中には、僅かであるがカラーの頁が含まれている。幸い『紫烟荘図集』（洪洋社、1927年）と『住宅双鐘居』（洪洋社、1928年）の中には絨毯の図柄がカラーで掲載されており、それを見

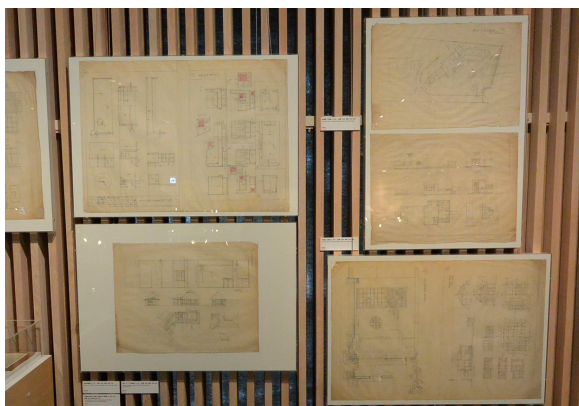


図11 「紫烟荘」関連の図面展示
左上と右上（2頁参照）の図面は2枚一組に描かれている。

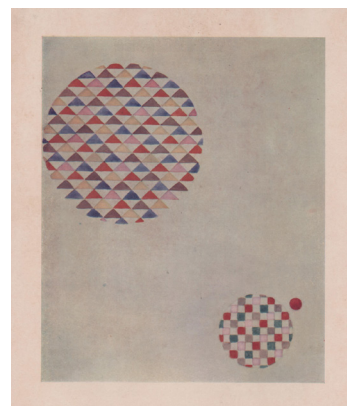


図12 「紫烟荘」の絨毯のデザイン図

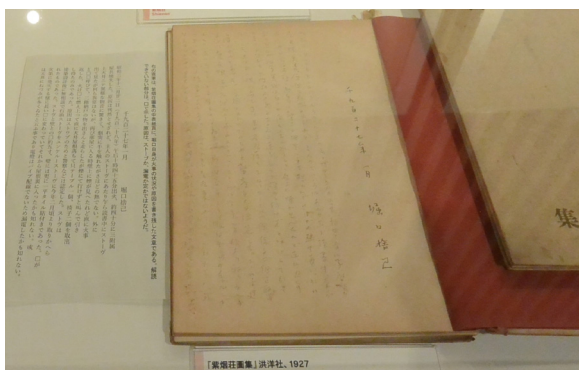


図13 「紫烟荘」の作品集の表紙裏に記された
火事についての考察



図14 岡田邸の家具のデザイン図

ると大変カラフルであることがわかる(図12)。実際の空間は、白黒の写真で見るとは異なり、多彩多色であったことが推測される。

また、『紫烟荘図集』の1冊には、竣工2年後に起きた火事の原因についての考察を直筆で書き込んだものが残されている(図13)。この書き込みは、完全には読解できないものの、大まかな火事の原因がわかると同時に、堀口が相当なくやしきをもって、この文章を残したであろうことが読み取れる。

岡田邸室内デザインを、カラーで描いた図面が残されており、これらもほぼA3サイズの図面が、2つにカットされているが、その輪郭が単純な長方形ではない(図14)。この理由も定かではなく、堀口が何か特殊な見せ方を考えていたのであることが推察される。

3.2 資料の来歴を明らかにする

堀口捨己建築資料(以下「堀口資料」)は、ご遺族と堀口捨己建築アーカイブズ(木村儀一、藤岡洋保、岩橋幸治、山崎鯛介が共同主宰)から受贈した資料群であるが、遡ると3か所の出所がある。堀口の没後、それらの残された資料はご遺族を含む関係者によって、複数の場所で保護、継承されてきた。その結果、包括的に堀口の足跡が辿れる稀有な資料群となった。当館では、受贈した資料群の出所は、フォンドレベルの来歴として公式ウェブサイトと所蔵品検索データベース(AtoM)で公開している。しかし、建築資料が守られ残される背景を積極的に広く伝えたいと考え、堀口資料の収集に取り組んだ青山(高瀬)道乃(元・文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員)による解説を展示パネルと本展の図録³に掲出した。

3.3 これまでの国内外の堀口捨己研究の成果を生かす

藤岡洋保(東京工業大学名誉教授)の『表現者・堀口捨己—総合芸術の探求—』(中央公論美術出版、2009年)に代表される堀口捨己研究からは、本展を開催する際に、基本的な事実を得ることができた。本展では、藤岡氏によるギャラリートークを3日間(1日2回)開催した。東京科学大学の山崎鯛介教授と研究室各位の協力を得て撮影したギャラリートーク映像は、文化庁YouTubeで公開した⁴。

堀口捨己研究は近年オランダでもなされており、2023年9月にアムステルダムへのットシップ・ミュージアムにて「堀口捨己とアムステルダム派」が開催されている。その際に制作された解説動画は、英語版・オランダ語版で、堀口とアムステルダム派との関連に着目

した内容であった。本展ではそれに日本語字幕をつけて上映した。また、本展開催中に、ヘットシップ・ミュージアムの創設者・名誉館長のアリス・ルーホルト氏を迎えて、2024年10月18日(金)16:30-17:30に「1923年：堀口捨己とアムステルダム派の出会い」と題する講演会を開催した。これらの解説動画や講演会は、堀口とアムステルダム派の関係を通じて、100年以上前に建築家・堀口捨己を介して行われた建築分野の日蘭交流に関して、アムステルダムにおける調査で新たに発見した内容を含んでおり、そうしたオランダでの最近の研究成果を知ることで、国内における堀口捨己研究にさらに深みを加えることができた(図15)。

3.4 堀口捨己監修『茶室おこし絵図集』の一茶室を原寸模型と通じて体験

堀口捨己監修『茶室おこし絵図集(全12巻)』(墨水書房、1963~1967年)に綴じられた「後藤勘兵衛茶室(現太閤山莊擁翠亭)」を茶室原寸に拡大した模型を展示し、その内部に入ることができるようにした(図19)。

起こし絵図という折り畳み式模型は日本の伝統文化のひとつである。『茶室起こし絵図集 全12巻』は、茶室研究の第一人者であった堀口捨己が、約50の茶室起こし絵図を12巻にまとめた書物である(図16,17)。

その第5巻に掲載された「後藤勘兵衛茶室(現太閤山莊擁翠亭)」は、起こし絵図に基づいて、2020年に原寸模型(制作：公益財団法人 窓研究所)が作成された。この模型は、海外4か所(ロサンゼルス、サンパウロ、ロンドン、コペンハーゲン)で展示されたが、日本においては、本展覧会での展示が初公開である。

この「擁翠亭」は、安土桃山時代から江戸時代初期の大名にして建築家・茶人・作庭家であった小堀遠州



図15 ヘットシップ・ミュージアム創設者・名誉館長アリス・ルーホルト氏による講演会
(展示室内にて開催、2024年10月18日)

(1579–1647)の作であり、京都上京区鞍馬口の擁翠園に建てられた。13の窓をもつ茶室として知られており、歴史上最も窓が多い開放的な茶室といわれる。障子や板戸の開閉によって、光の入り方を変化させ、様々な雰囲気を作り出すことができる独特の造りである。擁翠亭は、明治初期に解体されたが、その部材は140年以上も保存されており、2015年に保存部材を用いて、京都北区に再建された。(図18)



図16 『茶室おこし絵図集全12巻』(墨水書房、1963~67年)の内、第5巻

3.5. 資料に表れる多彩な活動を紹介

堀口の探求の多様さを具体的に示したいと考えたこと(本稿2章冒頭)、堀口資料を成す媒体は多岐にわたり生涯の活動が多彩であったこと(本稿3章1節)は既に述べた。こうした展覧会のコンセプトと堀口資料の豊かさや特徴をより意識的に示す目的で、オリジナルの資料を単独で陳列するだけでは伝わりづらいと考えられる資料を複数組み合わせで紹介した。

具体的には、展示室中央に円形の生涯年譜を制作し、年譜を軸にしてライフイベントに関連する写真、写真アルバム、書簡、和歌、著作の書籍、起こし絵図などの資料を陳列した。資料群に含まれる和歌は決して多くはないが、数寄の世界、起こし絵、桂離宮の庭園調査、「磔居」(1965年)について謳った作品もみられ、堀口の探求の広がりや表現の豊かさが感じられる。

更に、堀口が1960年代末に明治大学にておこなった講義の16編の録音テープ(6mオープンリール)⁵を媒体変換(電子化)した。そのうち、1編について講義の内容と関連する写真や書誌を活用し、堀口の肉声に静止画を重ねた視聴覚映像として公開した。編集は小池周子(元・文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員)の協力を得た。肉声を聞くことができるという点も、建築家の展覧会として極めて貴重であることを改めて認識した次第である。

4. まとめ

当館の限られた展示空間という制約の中で行った本展における工夫した点とその結果得られた特色や成果について述べた。資料は膨大であり、現在整理中の資料もあるので、いつの日か、すべての整理が終了した時点で、より規模の大きい展覧会が企画されることを願ってやまない。

本展は、堀口捨己に関する本邦初の総合的な展覧会であったため、建築界の中でも展示に関心を持つ施設や専門家に対してのアピールは大きかったといえる。

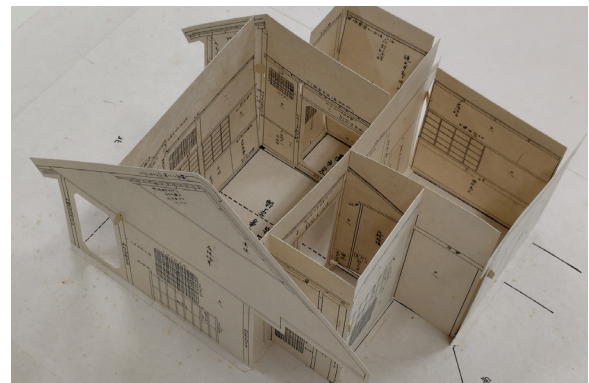


図17 起こし絵を平らな状態から立ち上げる



図18 太閤山莊擁翠亭の内部

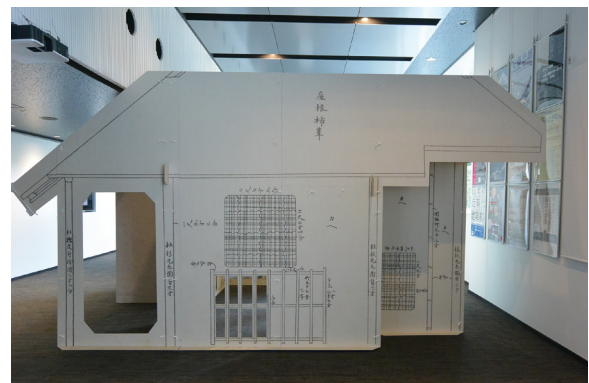


図19 ロビーに展示された擁翠亭の原寸模型

谷口吉郎・吉生記念金沢建築館では、本館の堀口捨己展に触発されて、建築館の谷口吉郎資料を総合して、2人の建築家を比較して展示するという興味深い企画に発展した(2026年2月14日～5月31日開催)。また、堀口が設計したサンパウロ日本館は、現在ブラジル日本文化福祉協会が所有して、様々なイベントに活用しているが、2026年3月～5月にこの日本館で、本館で行った堀口捨己展をベースにした堀口展が開催される。

本館での堀口展が、国内外において、堀口捨己を世に知らしめることに貢献し、他の堀口展へと展開できたことは、嬉しい限りである。



図20 谷口吉郎・吉生記念金沢建築館 第12回企画展
「堀口捨己と谷口吉郎—茶室に魅せられた建築家—」
展示風景

(撮影：藤森祐治)

注

- 1 <https://nama.bunka.go.jp/exhibitions/2408>
- 2 堀口捨己『SD8201 建築と庭園の空間構成』(鹿島出版会、1982年)、『建築文化8月号別冊 堀口捨己の「日本」空間構成による美の世界』(彰国社、1996年)、藤岡洋保『表現者・堀口捨己—総合芸術の探求—』(中央公論美術出版、2009年)など。
- 3 図録「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」
https://nama.bunka.go.jp/wp-content/uploads/2024/07/図録_堀口捨己の探求_モダニズム・利休・庭園・和歌.pdf
- 4 令和6年度「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」展 ギャラリートーク
YouTube 文化庁bunkachannel、再生リスト 国立近現代建築資料館
https://www.youtube.com/watch?v=5vYYZAAIzY&list=PL_ndIdJX38cDY2GoEbHMBmd9kqxh25UUZ&index=27
- 5 その一部を起こした文章「庭園序説」は、前掲注1『SD8201 建築と庭園の空間構成』(鹿島出版会、1982年)に掲載されている。

(2025年12月08日原稿受理)